

絵本に見る日仏文化と子ども観の比較

清水 りえ子 (福岡大学非常勤講師)

皆川 晶 (近畿大学九州短期大学)

A Comparative Study of Japanese and French Culture and Views of Childhood in Picture Books

Rieko Shimizu (Part-time lecturer, Fukuoka University)

Aki Minagawa (Kyushu Junior College of Kindai University)

要旨

日本とフランスでそれぞれよく読まれている幼児向けの絵本の比較を行った。主人公と家族のありふれた日常生活を中心に描いたロングセラーのシリーズ絵本を日仏2種ずつ選び、子どもを取り巻く日常の描写、個の尊重や自主性、子どもの言動、意思表示、感情表現、他者との関わり、言語表現に注目して分析し、そこに見られる文化的背景や子ども観の相違について比較、考察を試みた。その結果、本研究で取り上げた日本の絵本には、共感や協調性が多く見られ、他者との関係性や生活習慣の中での自主性が描かれていたのに対し、フランスの絵本では、個を中心とした自己表現、自主性が多く描かれ、感情表現や言語表現にも違いが見られた。

キーワード : フランスの絵本, 日本の絵本, 日仏比較, 文化的な相違

Abstract

This study conducted a comparative analysis of picture books for young children that are widely read in Japan and France respectively. Two long-selling series from each country were selected, each focusing on the ordinary daily lives of child protagonists and their families. The analysis examined depictions of children's daily environments, respect for individuality and autonomy, children's behavior, expression of intentions, emotional expression, interactions with others, and linguistic features of the text. Through this analysis, we attempted to compare and examine the differences in cultural backgrounds and views of childhood reflected in these works. The results revealed that the Japanese picture books examined in this study frequently portrayed empathy and cooperation, depicting autonomy within interpersonal relationships and daily life habits. In contrast, the French picture books predominantly featured individual-centered self-expression and autonomy, with notable differences also observed in emotional expression and linguistic features.

Keywords : French picture books, Japanese picture books, Japan-France comparison, cultural differences

1. はじめに

絵本の世界には、その国や地域の文化、価値観や習慣も反映される。日本は一般的に他者との調和や仲間との協調性を大切にす

る集団主義の国だと言われ、一方、フランスは個を尊重する個人主義の国であり、感情を表に出すことは日本ほど否定的に見られないとよく言われる。このような違いやそれを形成する文化的背景や習慣が、日本と

絵本に見る日仏文化と子ども観の比較

フランスの絵本にも象徴され、子どもの発達に影響するのか。さらに、その国や地域特有の文化的要素や価値観、子ども観が、ごくありふれた日常を描いた絵本にも見られるのだろうか。

浅木¹⁾は絵本の役割として、1)子どもが追体験できる 2)感動し、情緒を育てる 3)想像力を豊かにする 4)語彙を豊富にする 5)言語感覚を身につける 6)文字に関心を持つ 7)知的好奇心を満たす 8)考える力を育てる 9)知識や視野を広げる 10)人の気持ちを理解し、思いやりの心を育てる、と挙げている。

これらの役割からも、4) 5) の言語による明らかな違いだけでなく、絵本の中の文化的要素が子どもの発達に与える影響は大きいと考えられる。

森²⁾は、文化と人間形成について、日本人の両親のもとに日本で生まれ、日本語を母語としている5歳の女兒2人(1人は日本の幼稚園に通園、1人はアメリカの幼児学校に通学)の生活を例に挙げ、「一見、朝夕まで同じような生活の流れであるが、その内容は大きく異なっており、2人の生活に大きく影響していることが容易に推察できる。この影響すること(内容)が文化である。すなわち、いつ/どこで/何をどのようにすることが望ましいのか(良いのか)という行動規範を身につけていくことを影響するのが文化なのである」と説明している。また、「文化は、先天的に子供に備わっているものでなく、後天的に生活を通して学ぶものである」とも述べている。つまり、幼児向けの絵本に描かれている文化や価値観、習慣は、それがあつる国や地域に固有のものかどうかにより、子どもの発達への影響が異なってくると言えるだろう。

近年、在留外国人数は増加し続けており、在留外国人統計³⁾によれば、在留外国人数は3,588,956人、うち0-4歳は102,469人、5-9歳は100,288人となつており、外国にルーツのある子どもの保育施設への受け入れ

数も増加している。このような状況で、多様な文化、価値観、習慣が描かれた絵本の果たす役割は今後重要になってくると考える。

本研究では、日本とフランスの絵本を分析し、そこにどのような文化的背景や子ども観の相違が見られるのか、比較、考察を試みる。ごくありふれた日常生活を描いた絵本の作品の中にも、子どもを取り巻く環境や家族の関わり方、子どもの行動や感情表現に文化的な相違が認められるのか考察する。

2. 分析対象とした絵本と研究方法

1) フランスの絵本

フランスの幼児向けの絵本では、ペール・カストールシリーズが日本語に翻訳された作品も多くよく知られている。また、ババールやバーバパパ、リサとガスパールのシリーズなどのように、翻訳も多いが日本ではどちらかと言えばキャラクターとして広く知られているものもある。本研究では、このような日本において認知度が高い作品ではなく、日本語訳はひじょうに少ないが、ごくありふれた日常が描かれたフランスのどこの家庭にもあつる絵本のシリーズ2種を分析対象として選んだ。いずれも子どもたちと等身大の主人公と、その主人公を取り巻く穏やかな家族との日常生活(食事や風呂、遊び、就寝、買い物、親と過ごす時間など)を中心に、初めての経験(登園や雪遊びなど)、行事やイベント(誕生日やクリスマスなど)、友だちとの時間などが、さまざまな感情とともに描かれている。また、絵はどちらのシリーズもシンプルで、明るく優しい色で描かれている。

「Petit Ours Brun」シリーズ

「Petit Ours Brun」を直訳すると「小さな茶色のくま」であり、山脇百合子の訳では「ちやいろのこぐまくん」となっている。3歳のこぐまの男の子が主人公のこのシリーズは、フランスで1975年3月に誕生し、今年でちょうど50年を迎えた。Bayard社の幼

児用月刊誌『Popi』(1-3歳)と『Pomme d'Api』(3-7歳)に現在も毎月連載されており、テレビ放送もされている。今回の分析では、絵本として刊行されているものを対象とした。絵本は80タイトル以上出版されており、対象年齢はシリーズ全体については特に明記されておらず、作品により1-3歳、2-5歳などの紹介が見られる。1975年の誕生当初から絵はDanièle Bourが担当し、文は1984年からMarie Aubinaisが担当しており、50年経った今も新しい物語が生まれている。

日本では1989年に福音館書店から山脇百合子の翻訳で『ちやいろのこぐまくん1 あさごはん』『ちやいろのこぐまくん2 ゆきあそび』『ちやいろのこぐまくん3 ちいさないす』の3作品のみが出版されている。

「T'choupi」シリーズ

T'choupi チュピという名前のペンギンの外見的特徴を持つ擬人化された男の子を主人公とした絵本シリーズで、「Petit Ours Brun」同様、家族や友だちを中心としたありふれた日常生活の中での出来事や感情などをテーマにした物語が展開される。Thierry Courtinによる文と絵で、紙媒体の絵本の主人公としては1997年にフランスNathan社から誕生した。現在80タイトル以上が出版されており、紙媒体の絵本以外に、ゲームブックやオーディオブックなどデジタル媒体でも展開されている。シリーズの対象年齢はやはり特に指定されておらず、作品により1-4歳、3-6歳などと紹介されているものもある。

日本では2001年にポプラ社から『チュピ ようちえんにいく』『チュピはくいしんぼう』の2冊が出版され、2024年に『チュピ ほいくえんにいく』『チュピ おいしゃさんに行く』『チュピとりのりもの』の3タイトルがlanibooksから出版された。2024年に発売された3冊は、挿絵とは別に本文中の単語にもイラストが付けられたタイプのものであるが、シリーズの多くがこのタイプになっているわけではない。

2) 日本の絵本

日本の絵本は、子どもたちに長年親しまれシリーズとなっている2種を分析対象として選んだ。

「こぐまちゃんえほん」シリーズは1970年に誕生した。世代を超えて読み継がれ、現在はボードブックや点字付きの絵本などを含め、累計1000万部以上発行されている⁴⁾。1970年10月に『こぐまちゃんおはよう』『こぐまちゃんとおぼーる』『こぐまちゃんとうぶつえん』が発行され、1977年3月発行の『さよならさんかく』『ひらいたひらいた』まで15作品が制作された。

本シリーズは、絵を担当した若山憲、テーマ・原案・文章を担当した森比左志、ストーリー展開を担当した和田義臣、「こぐまちゃんえほん」シリーズを出版したこぐま社創業者佐藤英和の4人での共同制作である。

「こぐまちゃんえほん」は、佐藤⁵⁾の「日本の子どもがはじめて出会う本を作りたい」というコンセプトから生み出された。主人公のこぐまちゃんをはじめ登場人物はみなシンプルに明るく印象的な色で描かれている。子どもが経験する生活の中の一コマ、特別ではなく身近な出来事をテーマにした親しみやすいストーリーである。

「14ひき」シリーズは、いわむらかずお作・絵により『14ひきのひっこし』が1983年に誕生した。2007年の『14ひきのもちつき』まで12作品が出版されたロングセラーである。その人気は日本に留まらず、ドイツ、中国、スイスなど16か国語で翻訳され、海外でも出版されている。

本シリーズは、野ねずみのおじいさん、おばあさん、おとうさん、おかあさん、10匹の子どもたち14匹の大家族の物語である。家族は厳しい自然の中で助け合いながら暮らしている。四季折々の暮らしの営み、さまざまな工夫や家族の協力により、生活を楽しむ姿が描かれている。

3) 研究方法

前述のフランスのシリーズ絵本 2 種と日本のシリーズ絵本 2 種から、合計各 10 冊程度を分析対象として選定した。日仏いずれの国においてもごく一般的な日常生活の中の場面（食事、風呂、遊び、就寝、買い物など）や出来事、経験、家族と過ごす時間、行事やイベントを扱った内容のものを選び、日仏両方で共通の内容を扱っているもの（日常生活）は特に分析の対象とするようにした。また、フランスの 2 シリーズはタイトルがひじょうに多いが、両シリーズで共通の内容を扱っているものが多く見られることから、こうした作品を特に分析対象とした。

これらの作品の日常の中に見られる文化的背景、子どもの言動、意思表示、感情表現（怒る、泣く、喜ぶなど）、他者（特に親、家族）との関わり、言語表現に着目して比較分析を行った。

3. フランスの絵本と日本の絵本の分析

1) 日常生活

「Petit Ours Brun」シリーズ（以下 POB）にも「T'choupi」シリーズ（以下チュピ）にも欧米の絵本に登場する多くの子どもたち同様、独立した子ども部屋が存在し、そこで一人で遊ぶ様子が複数の話の中に描かれている。また、お風呂でもバスタブで一人で楽しそうに遊ぶ様子がどちらの作品にも見られる。子ども部屋で一人で遊んでいる時に母親が食事に呼びに来る場面や、入浴前後の服の着脱や入浴中のサポートを母親がするが継続してそこにいるわけではなく、バスタブで一人で遊ぶ場面が描かれている。旅行など出かける準備をする時に、自分のおもちゃは自分で準備をし、お気に入りのぬいぐるみは必ず自分で持ち、その横で服などは親が準備をするという役割分担も見られる。

子ども部屋で一人で寝るまでの様子は、

どちらのシリーズも日常の中に描かれているだけでなく、それ自体をテーマにしたいくつもの作品がある。寝る時にお気に入りのぬいぐるみがいつも一緒にいることは勿論、寝る前に傍で本を読んでもくれたりお話をしてくれたりする親の存在、寝る前のハグやキス、真っ暗にならないように準備された小さなランプ、子ども部屋のドアを少し開けておくこと（部屋の外から明かりが入り家族の物音が聞こえる状態にしておくこと）、一人になっても呼ぶとすぐに来られる親（祖父母の家では祖父母）がいることが共通している。安心して一人で眠れるようになるための環境が準備され、その中で眠りにつく話となっている。POB にもチュピにも暗闇で物音や影が怖くなり眠れなくなる話があるが、それに対しては、それが何によるものか原因を親や祖父母が説明することで安心させ眠らせている。また、『T'choupi n'a plus sommeil (チュピ もう眠くない)』では、夜明け前に目覚めてしまい子ども部屋から両親を起こしに来たチュピを父親が抱っこして連れ戻す場面がある。自分の部屋の自分のベッドが常に就寝のための定位置として描かれており、両親は安心して眠るための環境づくりをしている。それは祖父母の家に遊びに行った時も同様である。

『こぐまちゃんおやすみ』では、「8じです てればは おしまい ぱちん」を合図に寝る準備を始める。一人でパジャマに着替え、歯磨きをする。おとうさんと相撲をし、トイレに行く。布団に入り、おかあさんに絵本を読んでもらい寝る。寝る準備をはじめ、寝るまでの一連の行動が自然に描かれている。こぐまちゃんは自分で引き出しからパジャマを出し、着替え、歯を磨く。「ぼく ひとりで ふく ぬげるんだ」、「ねるまえにはを みがくの ぼく しているんだ」というこぐまちゃんの言葉からは、寝るまでの行動が毎日の積み重ねにより、身につけていることがわかる。「おかあさんに い

絵本に見る日仏文化と子ども観の比較

われないうちに」と、自分一人でできるのだという姿を、おかあさんに見せたい気持ちが表されている。その行動の中に、おとうさんと相撲をする楽しさ、おかあさんに絵本を読んでもらい安心して眠りにつく様子が加えられている。

『こぐまちゃんおはよう』、『こぐまちゃんのみずあそび』では、こぐまちゃんが一人でシャワーを浴びたり、お風呂に入る。「ぴちゃ ぴちゃ ぴゅっ ぴゅっ ふんすいだ ふんすいだ」、「しゃわーの おと ばらばら ばらん おもしろい」とお風呂の時間を楽しんでいる様子が描かれている。

『14 ひきのこもりうた』では、薪をくべたり、お湯をかき混ぜたり、家族で手分けをしてお風呂の準備をしている。大きな湯舟の中から、洗い場にいる兄弟に向けて水鉄砲をする子ねずみ、おじいさんの背中を洗う子ねずみ、せっけんを一生懸命に泡立てている子ねずみなど、大勢でお風呂に入るにぎやかな様子が描かれている。

2) 個の尊重、自主性、自由度

POB(ちゃいろのこぐまくん)にもチュピにもいつも一緒にいるぬいぐるみが頻りに登場し、寝る時などに安心感を与える重要な存在として描かれている。子どもにとって玩具以上の存在であり、子どもたちを支えるなくてはならないものであるため、POBでもチュピでも保育学校にも持って行く(連れて行く)ことができる。また、初めて保育学校に行く日を描いた『T'choupi rentre à l'école(チュピ 保育学校に入る)』では、食事の場所で座りたい席に座ることができる。昼寝の時間には、チュピが「僕、眠くない」と先生に伝えると、先生はチュピに本を読んでもいいが静かにしているように言う。絵には、寝ている子数名と、布団で本を読んでいるチュピの他に、ぬいぐるみを持って立っている子も描かれている。ここでは、全員が寝ることよりも、眠くないということを先生にきちんと伝えられること

が重視されているようである。それに対し、先生は全員に同じことをさせるのではなく、周りに迷惑をかけない代案を示している。昼寝の後は音楽の時間で、チュピもその友だちもそれぞれ自分が選んだ好きな楽器を演奏してみなで楽しむ様子が描かれている。このように保育学校初日の様子からも、個が尊重され、自立して過ごすために必要な環境づくりや大人の判断、それに伴う柔軟性や自由度の高さがうかがえる。

『こぐまちゃんいたいいたい』では、積み木が足に落ちたり、階段から滑って落ちたり、おやつのお団子の串が口に刺さったり失敗をする。「つよいこは かないのって おかあさんは いうよ」、「ぼく よわむし じゃない でも いたい いたいって なくときだつてあるんだ」と素直な気持ちを吐露している。しかし、「ゆっくり ゆっくり おりるんだ」、「こんどは おっこちても いたくないよ ね」と、次に階段を下りるときには頭に座布団を乗せている。「おさらにならべて もう へいき とがったものは いたいからね」と、お団子は串から外して食べる。座布団をヘルメットの代わりにするという知恵、階段は慎重に下りる、串が刺さると痛いのでお団子を外して食べる、という失敗から知恵や工夫が生まれた様子が描かれている。自分で考え、工夫し行動する姿が見られる。

『14 ひきのせんたく』では、家族総出で川に行き、みんなで協力して洗濯をする。それぞれが手分けして洗濯をしているなか、カエルが洗濯板の上に乗ったまま流されていく。子ねずみたちは川に入り、協力してカエルを助ける。洗濯板の上にいる小さな命、その命を守るために、それぞれが自分から進んで流れの速い川に入り、カエルが滝に流されないように協力する。子ねずみたちが小さな命を救うために、滝への恐怖を顧みず自分から行動する姿が描かれている。

3) 自己主張、意思表示

絵本に見る日仏文化と子ども観の比較

POB には買い物に行く話がいくつかあるが、こぐまくんがお母さんぐまとパンを買いに行く『Petit Ours Brun achète le pain (ちゃいろのこぐまくん パンを買う)』では、お母さんぐまとパン屋に入ったこぐまくんが、自分から母ぐまに「僕が買うよ」とまず自分がしたいという意思表示をした上で、母ぐまに「なんて言えばいい？」と聞いている。その後母ぐまに自分にお金を渡すように頼み、それから「バゲットをください。」と店員に言ってお金を払う。バゲットを受け取り、店員にお礼を言うと(フランスでは客がお礼を言う)、店員が笑顔で褒めてくれる。そしてバゲットを持って自信をつけ(満足し)帰る。ここでは、こぐまくんが自分の意思で一連の行動をし、パン屋の店員とのやり取りには母ぐまは介入せず必要な時にサポートをしながら見守る存在として描かれている。また、この一連の行為ができたことを褒めるのは母親ではなく店員である。

お父さんぐまと買い物に行く『Petit Ours Brun fait les courses (ちゃいろのこぐまくん 買い物をする)』では、父ぐまとこぐまくんとの役割分担がされ、父ぐまが野菜を買い、こぐまくんが小玉ねぎを持つ、父ぐまが魚屋を探し、こぐまくんが見つける...と話は続いていくが、最後にこぐまくんが父ぐまにママにお花を買おうと提案する。これに父ぐまはとてもいい考えだと賛同し、2人で一緒に花を選ぶが、帰って母ぐまに花を渡すのはこぐまくんの役割である。こぐまくんは父ぐまとの買い物の中で小さな役割を果たしていき、最後は自分が提案をしてそれが成功し自信につながる(満足する)という話である。いずれの話も、こぐまくんの意思表示や提案があり、それが達成できたことに「自信を持つ (Il est très fier)」ところで終わっている。また、それを見守る親の姿も描かれている。

『T'choupi n'a plus sommeil (チュピ もう眠くない)』では、夜明け前に目が覚めてしまったチュピが、まだ寝ているように言

われても、もう眠くないからと自分の部屋で音楽を聞いたりベッドで跳ねて遊んだりする。また、『T'choupi prend son bain (チュピ お風呂に入る)』では、お風呂に行くように母親に言われても「後で。今は遊んでいるから。」と返事をし、お風呂では「シャンプーをしたくない」と母親に伝える。こうした言動に対し、親は代案を出すことはあるが、多くの場合見守る存在として描かれる。

言うことを聞かないことをテーマにした作品も両シリーズにいくつかある。『T'choupi dit non! (チュピ いやと言う)』では、公園で遊んでいるチュピに父親が「もう帰ろう」「あと2回したら帰ろう」「公園が閉まるから帰ろう」と何回言っても、「non (いや)」と言って帰ろうとしない。やがて疲れて転んで泣き出すことで状況は変わり、父親と閉園時間まで一緒に空を眺め穏やかな時間を過ごしてから帰途につく。最後に「明日もまた来ようね」と言う父親にチュピが「oui (うん)」と答え、それに対し父親が「ほら、oui (うん) もいいでしょ？」と言って終わる。

初めて保育学校に登校する日には、こぐまくんもチュピも自分は今もう「大きい (grand)」ことを自覚しそれを口に出している。『T'choupi rentre à l'école (チュピ 保育学校に入る)』では、朝からはりきっていたチュピが、学校に到着するや「怖いよ (J'ai peur)」と母親に言い、なかなか母親から離れたがらずキスをせがむ。しかし、昼寝の時間には2)で触れたように先生に自分が眠くないことを伝えることができている。

『こぐまちゃんありがとう』では、「ぼくたくさん おてつだい するんだ みんなありがとうって いうんだもん」と、こぐまちゃんが自分から進んでお手伝いをしている姿が描かれている。新聞を取ってきたり、洗濯物を干したり、お手伝いするとおとうさんもおかあさんも「ありがとう」と言ってくれる。「ありがとう」と言われて、うれしい様子が描かれている。しかし、音楽隊を見

ているうちに迷子になり、しろくまちゃんのおじさんに助けられたときは「ありがとう おじさん」とお礼を言うことができた。「ありがとう」という感謝の言葉は、いつもおとうさん、おかあさんに言われているからこそ、自分が助けられたときには、自分から進んで自然に「ありがとう」と言えた姿が描かれている。

「14 ひき」シリーズは、自然の厳しさの中で、大家族が協力しながら生活していく姿が描かれており、自己を主張する言葉は書かれていない。『14 ひきのこもりうた』では、子ねずみたちの寝る前の一コマが描かれている。寝る支度の時間になると、子ねずみたちは「よんで よんで、きのうの つづき」とおかあさんの読み聞かせを聞いたり、おかあさんの話を聞きながら着替えをしたり、おいかけっこしたり、ベッドの上で枕投げをしたり、おばあさんの子守歌を聞いたりしている。普段は家族で協力しあって生活しているが、寝る前のほんのひと時を、自分の好きなことをして過ごす、子ねずみたちの様子が描かれている。

4) 感情表現

POB にもチュピにも、子どもたちにとって等身大の主人公が日常の中で持つさまざまな感情が描かれている。初登校日の期待や自信や不安、一人で寝る時の不安と安心、買い物で自分の目的が達成された時や提案が成功した時の自信などである。転んで怪我をした時、お気に入りのぬいぐるみが見つからない時、暗闇が怖い時、怒りにより自分がコントロールできなくなった時など、異なった状況において泣く様子も描かれている。

両シリーズに“bobo”（痛い痛い、怪我）をしてしまう話がある。『Petit Ours Brun a un bobo (ちゃいろのこぐまくん いたいいたい)』では、こぐまくんが転んで怪我をしてしまい、泣き出して母ぐまのところに行き、手当てをしてもらう。『T'choupi a un bobo(チ

ュピ いたいいたい)』では、お母さんから気を付けるように言われているのにブランコを高く漕ぎすぎてしまい、落ちて膝を擦りむき、お母さんに手当てをしてもらう。いずれにも共通しているのが、母親が「大丈夫よ」と優しい言葉をかけ手当てをして絆創膏を貼ってくれること、そしてその絆創膏が「特別な」「きれいな」という形容詞を伴い、特別な絆創膏として書かれている点、最後に甘えさせてくれる点である。こぐまくんは最後に抱っこしてもらい、チュピは最後に怪我をした膝にキスしてもらい、どちらもスキンシップにより痛みや不安が安心感に変わり話が終わっている。お母さんが気を付けるように言っていたのにそれを聞かないで怪我をしてしまったチュピの気持ちや学びについては特に書かれていない。どちらも甘えたい時に甘えさせてくれる母親の存在と、その母による手当てやスキンシップと、「特別な」絆創膏とにより、気持ちを切り替えられ安心する点が共通している。

初めて保育学校に登校する特別な日を描いた作品には、いずれのシリーズも、朝起きてから保育学校に到着するまでの期待や嬉しさ、自分はもう大きいと得意気な様子が描かれている。しかし、学校に到着し、慣れた家庭を離れ、新しい外の世界で家族以外、他の子どもたちや学校の先生がいる未知の社会に入らなければならない時に、それは不安に変わっている。『Petit Ours Brun va à l'école (ちゃいろのこぐまくん 保育学校に行く)』では、こぐまくんは両親と登校するが、登校中は張り切って一人で歩きたがる。ところが、保育学校に着くやいなやそれは一変し、不安から一方の手を父ぐまと、もう一方の手を母ぐまとつなぐ。しかし、そこに現れた保育士の声かけに「僕はもう大きいんだよ」と堂々と反応することができ、家族を離れ新しい社会に入っていくところで話は終わる。他方、『T'choupi rentre à l'école (チュピ 保育学校に入る)』では、学校到

絵本に見る日仏文化と子ども観の比較

着後の不安は、知っている友だちが登校してきて状況が変わったことで安心に変わり、お迎えの時間に父ぐまが来るまで楽しい一日を過ごす。両親と登園するこぐまくんに対し、チュピは行きは母、お迎えは父となっているが、いずれも大切な初登校の日に両親を登場させている。また、新しい世界への不安が、先生が話しかけることや、知っている友だちが登校することなど、何か状況が変わることによってなくなっていく点も共通している。

怒りをテーマにした作品もどちらにもあり、『Petit Ours Brun est en colère (ちやいろのこぐまくん 怒る)』では、こぐまくんが1人で自分の部屋で遊んでいるところに母ぐまが食事に呼びに来るが、こぐまくんは行きたくないと言い、突然腹を立て、ものを投げたり蹴ったりして自分を押しさえられず泣きわめく様子が描かれ、「苛立つ、腹を立てる (s'énerver)」や「怒る、腹を立てる (en colère)」という語彙を使い感情が直接的に表現されている。こぐまくんが苛立ち怒り出すと母ぐまはその場からいなくなるが、やがていつか怒りが収まると母ぐまが部屋に入ってくる。母ぐまにハグをされたこぐまくんは「怒りは窓からどこかに行っちゃったんだ」と伝え話は終わる。『T'choupi est en colère (チュピ 怒る)』では、母に叱られ腹を立てたチュピが、祖父母の家に行くと言い出し一人で荷造りを始めるが、一緒に連れて行きたかったお気に入りのおぬいぐるみ見つけられずに泣き出し、母親に見つけてもらった時にはもう怒りは収まっているという話だ。怒りの原因は親に何かするように、またはしないように言われたことであるが、怒りの感情が現れた時に、親の存在は絵本から消えている。そして、何かが起こったり時間が経ったりして気が紛れたことで怒りが収まっている。ここからは、感情は自然に起こるものであり、且つ一過性のものであるとして描かれていることがわかる。また、親はそれをコントロールすることも否定す

ることもせず、必要とされたときに話を聞き支える存在となっている。

『こぐまちゃんおやすみ』では、こぐまちゃんが「あのねえ あのねえ」、「どうしたのこぐまちゃん」、さらに「あのねえ あのねえ」とおかあさんに読み聞かせをねだる。この「あのねえ」には、おかあさんに甘えたい気持ち、寝る準備が一人でできたご褒美に絵本を読んでほしい気持ちがよく表れている。

『こぐまちゃんのどろあそび』では、おかあさんに買ってもらったスコップで泥遊びをする。たくさん作った泥だんごを丁寧に並べたのに、その泥だんごをしろくまちゃんが「いしけり ぴよん もひとつ ぴよん」と言って楽しそうにつぶしている。それを見たこぐまちゃんは「しろくまちゃんだめっ つぶしちゃ だめっ」、「だめっだめっ だめっ」と言って、ついしろくまちゃんを倒してしまう。一生懸命に作った泥だんごをつぶされ、「だめっ」という一語にこぐまちゃんの悔しい気持ちが込められ、その感情からしろくまちゃんを倒してしまうが、すぐに「ごめんね こぐまちゃん」、「ごめんよ しろくまちゃん」とお互いが謝り仲直りすることができた。こぐまちゃんは悔しい気持ちを露わに言葉と行動で表すが、自分の言動に対してすぐに謝ることができた。こぐまちゃんの気持ち、しろくまちゃんの気持ち、それぞれがお互いの気持ちに共感し、仲直りできた姿が描かれている。

『14 ひきのさむいふゆ』では、雪の降る寒い日にゲームを手作りしている。ゲームが完成して「できた できた」、おやつになると「わーい、わーい、わーい」「おいしい！」などと喜びの感情を簡単な言葉で表している。そりを作る場面では「とっくんトラック、おまんじゅうトラック。いいな いいな、とっくんいいな」という文しかないが、絵では、おまんじゅうを載せたトラックを引いているうれしそうな表情の子ねずみが描かれて

いる。それをうらやましそうに見る子ねずみや、そり作りに集中している子ねずみ。特別な言葉はないが、それぞれの感情が絵の子ねずみたちの表情から読み取ることができる。

5) 言語表現

文法的には、POB はこぐまくんが三人称単数の主語となり現在形の平易な文で書かれていることが多い。また、会話文も、「こぐまくんが～と言うと、お父さんぐまは～と答えます。」という形の平易な文で書かれている。チュピは一人称単数（自分）と二人称単数（相手）が主語の会話文が多く、やり取りで話が展開していくものがよく見られる。

日本語の絵本でひじょうによく使われるオノマトペや同じ語の繰り返しは、今回分析対象としたフランスの作品にほとんど見られなかった。オノマトペが豊かである日本語と比べそもそもフランス語には少ない。しかし、両シリーズとも怪我の話は言語表現が特徴的で、チュピがブランコから落ちた時には「Patatras! (ドスン、ドシンのような、物が落下する時の擬音語)」という擬音語が使われている。また、POB では、こぐまくんが転んだ時に「痛い、痛い、痛い」と3回言うが、このように同じ語を3回繰り返す部分が3箇所ある。

POB にこぐまくんが何回もつまみぐいをする話があり、フランス語の原作では擬音語は使われておらず、つまみぐいをする時の文章はこぐまくんが三人称単数の主語の平易な動詞文となっている。一方、山脇百合子の日本語訳『ちゃいろのこぐまくん あさごはん』には、つまみぐいをする度に「ぼりぼり」「もぐもぐ」などのオノマトペが加えられている。また、原作は同じく三人称単数の平易な動詞文で語彙の繰り返しによりリズムをつけている作品であるが、山脇百合子の日本語訳『ちゃいろのこぐまくん ゆきあそび』にはいくつもの擬態語が加え

られている。

POB の作者である Marie Aubinais は Bayard 社のホームページの POB50 周年を記念する 2025 年 5 月のインタビュー記事⁶⁾において、文を書く時はできるだけ平易になるよう気を付けていると述べ、例として代名詞の「彼 (il)」がこぐまくんかお父さんぐまかわからなくなならないよう「彼」ではなく「ちゃいろのこぐまくんは…」と繰り返さなければならぬため重い文章になってしまふことを挙げ、それを補うためにリズムや韻などの音楽的要素を取り入れていると説明している。

「こぐまちゃん」シリーズではオノマトペが多用されている。特に多いのが『しろくまちゃんのほっとけーき』である。ホットケーキを作る工程で、「たまご ぼとん」、「こなは ふわふわ ぼーるは ごとごと」から始まり、フライパンの上に生地が「ぼたあん」「どろどろ」「ぴちぴちぴち」「ぷつぷつ」「しゅっ」「ぺたん」「ふくふく」「くんくん」「ぼいっ」とオノマトペだけで焼いている様子、ふわふわのホットケーキができあがる様子がイメージできる。このオノマトペが読み手の想像力を掻き立て、「おいしそう」、「食べたい」、「作ってみたい」という気持ちを高める効果がある。

「14 ひき」シリーズもオノマトペが多様されている。『14 ひきのもちつき』では米の下準備から始まり、臼と杵を使って餅つきをする様子が描かれている。せいろで蒸した米を臼に入れ「こしを いれて、ぐっ ぐっ ぐっ」、「ぺったん とったん、もちつきが はじまった。ずしん ずしん、じめんが ゆれたよ おとうさん」、「ぺったん とったん」、「とととと、きねに おもちが すいついた」、「ぺったん ぺたん、とったんとたん」、「くるん くるん まるく ちぎって、あんころもち きなこもち」と、オノマトペだけで杵で米をつく姿、やわらかい餅ができる様子、餅を丸める楽しさが伝わってくる。臼と杵で餅つきをする昔ながら

の風景が、オノマトペを使用することで楽しく描かれている。

4. 考察

フランスの 2 シリーズにおける親や周りの大人の関わり方を見ると、役割を与える、役割を全うできるようサポートする、うまくいかない場合や嫌がる場合は代替案を示す、気を紛らわす、などの対応が見られた。また、子どもの意思を尊重し提案を受け入れ、さらに、他者に迷惑をかけない場合は個を尊重し自由度が高い。親による過度な干渉は見られず、親は見守るものの終始継続してではなく、始めと終わり、あるいは途中までのように、必要な時に現れるという描かれ方である。そして、子どもとのコミュニケーション、スキンシップ、キス、ハグや、環境づくりにより、子どもの主体性、自立をサポートし、子どもが自分の周りに広がっていく世界を発見できるよう環境を整え、サポートし、安心させる存在として傍にいる。時には一緒に何か楽しいことを企む同志ともなる。

Bayard 社のホームページの POB 紹介ページ「Qui est Petit Ours Brun? (ちゃいろのこぐまくんってだれ?)」では、こぐまくんが子どもたちと同じ日常を生きる共感できるヒーローであることを「鏡 (miroir)」という言葉で表現している⁷⁾。また、作者である Marie Aubinai は、子どもたちは自分と同じ年頃のこのこぐまくんに自分自身を重ね合わせるため、誰もが共感できるような小さな子どもの感情を表現するよう努めていると説明している。さらに、50 周年を記念する同ホームページのインタビュー記事⁸⁾では、こぐまくんは日常で感じていることを言葉で表現することができ、その感情に気づかせてくれるヒーローとして描いていると言っている。また、子どもたちが認識している世界が大人とは異なるのは、子どもたちがまだ世界を発見していく途上であるた

めであり、作者として子どもの視点を常に持ち続けることが重要であると述べている。

フランスの 2 シリーズには、小さな主人公の自分の空間、自分の時間、自分の意思による言動、感情が描かれている。自分で考え選び、それを他者に伝える子どもの姿、自分の意思により言動を起こす姿、自分の感情を理解しそれを表現する姿、「うん (oui)」も「ううん/いや (non)」も伝えられる子どもの姿が描かれている。こうした個の実現のために、この小さな主人公たちだけの空間や時間は何でもない日常の中で重要な役割を持っているのだろう。浅木は絵本の役割として、子どもが追体験でき、考える力を育て、人の気持ちを理解し、思いやりの心を育てる、など 10 項目を挙げたが、フランスの絵本の分析からは、さらに自立性・自主性を育て意思表示をする力、自分の感情と向き合いそれを表現する力も育てる役割があることがうかがえる。

『こぐまちゃんおはよう』では、「こぐまちゃん は じぶんで かおを あらいます」、「はみがき くちゅ くちゅ」、「おかおを ぷるぷる いいきもち」、「こぐまちゃんは いっぱい たべます」、「こぐまちゃんは まいにち うんちを します」、「おふろです」、「おやすみなさい おかあさん」と、朝から夜までの生活を描いている。読み手の子どもは読み進めながら、こぐまちゃんの行動を通して、基本的な生活習慣を楽しく身につけることができる。

こぐまちゃんは、決まった時間になると自主的に寝る準備を始め、お風呂は一人で入り、その時間を自分なりに楽しむことができる。失敗しても工夫を凝らし、同じ失敗を繰り返さないようにする。嫌なことがあればその感情を言動で表すが、相手の気持ちに共感することで自分の言動を見直すことができる。感謝の気持ちを素直に言葉で表すことができる。

以上のように、「こぐまちゃんえほん」シリーズには、親として、子どもには理解して

絵本に見る日仏文化と子ども観の比較

ほしい気持ちや身につけてほしい生活習慣が端的にわかりやすく描かれている。乳児向けの絵本であるが、身近な場面で経験する一コマをテーマにし、リズムカルな言葉を用いて子どもに身につけてほしいことがこぐまちゃんに込められ、子どもの自発性、自主性を促している。

「14 ひき」シリーズは、「あたまたに いっぱい せんたくもの、だあれ？」(『14 ひきのせんたく』)、「すてきな ぼうしを かぶったの だれ？」(『14 ひきのあさごはん』)、「あれれ、さっちゃん どこ いった？」(『14 ひきのさむいふゆ』)など、「問いかけ」の表現を使っている。この「問いかけ」に対する答えはなく、読み手が絵の中から探るのである。この「問いかけ」について、案田⁹⁾は「直接的で短い問い掛けの中には、いわむら氏が日常生活の中で父親として子どもたちと対話してきた姿、そのものが投影されている」と示している。作者の家族愛が野ねずみたちに投影されているといえよう。この「問いかけ」から、絵の中の子ねずみたちを注視することにより、読み手である子どもを心情理解や状況判断へと導くことができる。

本シリーズは少ない文の中でも、繊細で丁寧な絵を見ることでそれぞれの感情を読み取ることができる。文が少ないからこそ、読み手が野ねずみたちの心情を想像することができる。自然の中で暮らすからこそ生まれる家族への愛、協力する気持ち、自主的に自分のできることをする行動力が読み取れる。

5. おわりに

本稿で取り上げた日本の絵本には、協力や協調性、共同、思いやりや他者への配慮、共感が多く見られ、他者との関わりの中での自発性、自主性も描かれている。朝起きて寝るまでの生活も自分のことは自分でできるように描かれ、その自主性を促すように

描かれている。感情表現は明示的な言語表現ではなく絵や少しの文によるもので、そこから感情を読み取り心情を想像することができる。一方、フランスの絵本には個が中心に描かれ、個として自己表現をする姿からは、日本の絵本とは異なった自主性が認められる。自分で考え感じたことを言葉により他者に伝え自己主張をするために、意思表示や感情表現には直接的な語彙や表現も多く使われている。日仏ともに「自主性」が描かれているが、その「自主性」の捉え方には違いがあることが明らかになった。

「14 ひき」シリーズは、海外でも翻訳出版されているので、作品に描かれている集団生活や協調性が異なる国や文化においてどのように受け入れられ、どのように表現されているのかは、今後検証する必要があると考える。さらに、冒頭でも述べたように、外国にルーツを持つ子どもたちが日本の幼児教育機関にも多く在籍している。多文化共生に向けて、「よい子」とはどのような子であるのか、「自主性を育てる」とは何を意味するのか、異なる多様な価値観や文化に触れる機会となる絵本が果たす役割は多くあると考えられる。これらについては、今後の課題としたい。

注

- 1) 浅木尚実『絵本から学ぶ子どもの文化』同文書院 2015
- 2) 小田豊・森眞里編著『子どもの発達と文化のかかわり』光生館 2007
- 3) 法務省『在留外国人統計(旧登録外国人統計)統計表 2024年12月末』
https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html 2025年8月6日参照
- 4) こぐま社「KOGUMA-CHAN」
<https://www.kogumasha.co.jp/kogumachan> 2025年8月7日参照
- 5) 絵本ナビ「『しろくまちゃんのほっとけーき』40周年記念 こぐま社相談役 佐藤

絵本に見る日仏文化と子ども観の比較

英和さんインタビュー」

https://www.ehonnavi.net/specialcontents/contents_old.asp?id=38&pg=2 2025年8月25日参照

6) “Marie Aubinais : Petit Ours Brun est le héros de la vérité du quotidien”. Petit Ours Brun fête ses 50 ans. 2025-05-07. Bayard Jeunesse.

<https://www.Bayard-jeunesse.com/infos/Petit-Ours-Brun-fete-ses-50-ans/Marie-Aubinais-Petit-Ours-Brun-est-le-heros-de-la-verite-du-quotidien/?srsltid=AfmBOopLZtrAFhHrXihT-RtJPFYKi9XCMPbxxLNrIoNu9P5n1CiG8Rrs> 2025年7月31日参照

7) “Qui est Petit Ours Brun?”. Pomme d’Api. Bayard Jeunesse.

<https://www.Petit-Ours-Brun.com/fans/qui-est-Petit-Ours-Brun/> 2025年7月31日参照

8) 6) に同じ

9) 案田順子「シリーズ絵本における表現の特性と意義 [I]—いわむらかずお『14 ひきのシリーズ』をめぐって—」高崎健康福祉大学紀要 第3号 2004 p107

文献

浅木尚実『絵本から学ぶ子どもの文化』同文書院 2015

石澤小枝子『フランスと子ども絵本史』遊文舎 2009

小田豊・森眞里 編著『子どもの発達と文化のかかわり』光生館 2007

小林由比「絵本『こぐまちゃん』半世紀 誕生秘話とロングセラーの理由 子どもの本質に向き合う誠実さ」「子どもとの日々を支える東京すくすく」東京新聞

<https://sukusuku.tokyo-np.co.jp/oyako/58726/> 2025年8月25日参照

末松氷海子『フランス児童文学への招待』西村書店 1997

童心社『『14 ひきのシリーズ』いわむらかずおさんにインタビュー—シリーズ35周年と

『14 ひきのひっこし』100部によせて』
doshinsha.co.jp/news/detail.php?id=1418

2025年8月2日参照

長野麻子「子どもと自然—いわむらかずおの『14 ひきのシリーズ』と絵本の丘美術館についての考察—第1部:『14 ひきのシリーズ』のテーマ」東京成徳大学 子ども学部紀要 第7号 2017 pp.25-48

成岡恵子「日本語乳幼児向け絵本に見られる『場』志向性」日本女子大学英米文学研究 第58号 2023 pp.199-225

古市 久子・西崎 有多子「絵本の翻訳に何が影響しているか～日英の絵本を通して～」『東邦学誌』第38巻第1号 2009 pp.27-51

宮地敏子「絵本による異文化理解についての一考察」『国際幼児教育研究』3巻 1996 pp.47-55

村知稔三・砂糖哲也・鈴木明日見・伊藤敬佑編『子ども観のグローバル・ヒストリー』原書房 2018

森久保仙太郎・偕成社編集部 編『絵本の世界 作品案内と入門講座』偕成社 1988

ダニエル・ブール『ちやいろのこぐまくん1 あさごはん』山脇百合子訳 福音館書店 1989

ダニエル・ブール『ちやいろのこぐまくん2 ゆきあそび』山脇百合子訳 福音館書店 1989

ダニエル・ブール『ちやいろのこぐまくん3 ちいさないす』山脇百合子訳 福音館書店 1989

いわむらかずお『14 ひきのあさごはん』童心社 1983

いわむらかずお『14 ひきのさむいふゆ』童心社 1985

いわむらかずお『14 ひきのせんたく』童心社 1990

いわむらかずお『14 ひきのこもりうた』童心社 1994

いわむらかずお『14 ひきのもちつき』童心

絵本に見る日仏文化と子ども観の比較

社 2007

森比左志、わだよしおみ、若山憲『こぐまちゃんおはよう』こぐま社 1970

森比左志、わだよしおみ、若山憲『こぐまちゃんいたいいたい』こぐま社 1971

森比左志、わだよしおみ、若山憲『こぐまちゃんのみずあそび』こぐま社 1971

森比左志、わだよしおみ、若山憲『こぐまちゃんありがとう』こぐま社 1972

森比左志、わだよしおみ、若山憲『しろくまちゃんのほっとけーき』こぐま社 1972

森比左志、わだよしおみ、若山憲『こぐまちゃんのどろあそび』こぐま社 1973

森比左志、わだよしおみ、若山憲『こぐまちゃんおやすみ』こぐま社 1973

Aubinais Marie, Bour Danièle, 2021, *Petit Ours Brun a peur du noir*, Montrouge, Bayard Jeunesse

Aubinais Marie, Bour Danièle, 2005, *Petit Ours Brun a très faim*, Montrouge, Bayard Jeunesse

Aubinais Marie, Bour Danièle, 2015, *Petit Ours Brun a un bobo*, Montrouge, Bayard Jeunesse

Aubinais Marie, Bour Danièle, 2015, *Petit Ours Brun achète le pain*, Montrouge, Bayard Jeunesse

Aubinais Marie, Bour Danièle, 2017, *Petit Ours Brun est en colère*, Montrouge, Bayard Jeunesse

Aubinais Marie, Bour Danièle, 2017, *Petit Ours Brun fait les courses*, Montrouge, Bayard Jeunesse

Aubinais Marie, Bour Danièle, 2002, *Petit Ours Brun joue dans la neige*, Montrouge, Bayard Jeunesse

Aubinais Marie, Bour Danièle, 2013, *Petit Ours Brun va dormir*, Montrouge, Bayard Jeunesse

Courtin Thierry, 2018, *T'choupi a peur du noir*, Paris, Nathan

Courtin Thierry, 2014, *T'choupi a un bobo*, Paris, Nathan

Courtin Thierry, 2016, *T'choupi dit non !*, Paris, Nathan

Courtin Thierry, 2017, *T'choupi est en colère*, Paris, Nathan

Courtin Thierry, 2006, *T'choupi et les courses*, Paris, Nathan

Courtin Thierry, 1997, *T'choupi n'a plus sommeil*, Paris, Nathan

Courtin Thierry, 2009, *T'choupi part en vacances*, Paris, Nathan

Courtin Thierry, 2006, *T'choupi prend son bain*, Paris, Nathan

Courtin Thierry, 2017, *T'choupi rentre à l'école*, Paris, Nathan

Serre Hélène, Bour Danièle, 2015, *Petit Ours Brun va à l'école*, Montrouge, Bayard Jeunesse